後悔なんて最初から知らない

作詞　**J'Soul**（浅羽一）

才能なんかドブに捨てて雨に流した
憧れなんか犬に食わせて牙にさらした
夢はただ語るだけですら乾いた資格を必要とした
現実だけを腕に抱いて床(とこ)に入った
感触だけを胸に刻んで闇を探った
幸せは形も知らない幸運の名だと分かっていた
それが世界の心なのだと　僕は歯車の一つになりながら知っていた
平等な世界など恵まれた人間が歌った幻想で
報われぬ願いなど余りにもありふれたつまらぬ言い訳で
この手の中に握った空気は　今の瞬間を切り取った一部で
ほらまた聞こえる　一つの椅子に座った者の歓喜の声が
そして遠ざかる　一つの椅子から落ちた者の慚愧(ざんき)の歌が
誰かの膝の上で笑う寝顔など　泥に汚れた絵本の中でだけだった　▲

屈辱たちと夜を過ごし月を眺めた
無力さたちと肩を並べて日々を歩いた
がむしゃらに腕を振り回し自分の影を振り切ろうとした
感動などは意味をなくし術(すべ)も忘れた
羨望などは価値を持たない無駄に染まった
淋しさの感情ばかりが知らぬ間に色を無くしていた
決して変わらぬ真理なのだと　世界の片隅でうずくまりながら思っていた
満たされた世界など盲目の幼子(おさなご)が描いた空想で
騙し絵の扉から飛び出した皮肉の中で人は生きている
たった一つのくだらぬ違いが　善と悪との境界になる中で
▲繰り返し

始まりに置いてあるそれぞれの紙が　そのまま終わりの場所を記す地図になり
空から産み落とされた位置で　地中の宝箱までの距離が決まる
船もないのに　海に囲まれた島で目覚める人もいる

▲繰り返し